

第210回aacaフォーラム:Aalto talks in JAPAN

アルヴァ、アイノ、エリッサ・アルト:建築とデザインにおける人間的アプローチ

フォーラム委員会

第210回aacaフォーラム「Aalto talks in JAPAN」では、フィンランド・ユヴァスキュラ市にあるアルヴァ・アルト設計のセイナツアロ(Säynätsalo)町役場を拠点に、アルトの建築遺産を継承するガイドツアー「aaltotalks」に取り組むPeter de Groot氏(以下、ピーター)とAnnika Vandevelde氏(以下、アニッカ)ご夫妻を迎える、「アルヴァ、アイノ(前妻)、エリッサ(後妻):3人のアルトによる協働の本質」に迫った。

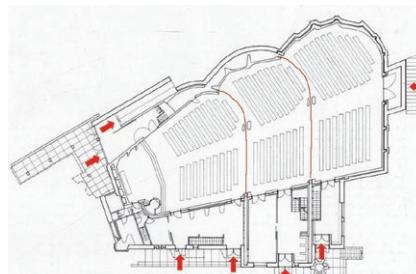
建築家アルヴァ・アルトの名のもとに語られるがちな作品群は、実際にはアイノ、そして後年のエリッサとの協働によって形づくられた総体である。三者それぞれの個性、才能、そしてビジョンはいかに交差し、建築、家具、ガラス工芸といった成果へと結実したのか。ピーターとアニッカの語りによって、作品創造のプロセスが丹念に紐解かれていった。

冒頭で詩人ミュリエル・ルーカイザーの言葉「宇宙は原子ではなく、物語でできている」を引用。一方通行の「lecture」というよりも、会場との呼応の中で思考を紡ぐ「talk」のように本トークを進めるとし、「アルトの物語を語る(talk)」ことと同時に、「アルト建築が私たちに語りかけてくる(talk)」場が立ち上げられた。

ピーターとアニッカは、場の空気を身体で感じ取るためにセイナツアロ町役場の「aaltotalks」ではいつも裸足となる。今回も素足となって臨んでいた。

フィンランドは長くスウェーデンとロシアの支配下にあり、1917年に独立後も内戦と貧困に苦しんだ歴史があり、アルトは「新しい国の文化とアイデンティティを形にする」使命を担い、その象徴のひとつとしてイマトラの「三つの十字架の教会」は設計された。この教会は、光と音を重視した彫刻的空間で、曲線天井や高窓が柔らかな自然光を取り込み、静謐で

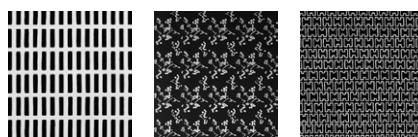
詩的な雰囲気を生み出している。イマトラは戦後、3つの村が合併して誕生した町で、その象徴として3本の十字架を持つだけでなく、教会の内部空間も3つに分けられている。



三つの十字架の教会 平面図

「建築を構成するのは、素材や寸法だけではない。その背後には、生活、記憶、自然、社会、そして人と人との関係が幾層にも折り重なっている。そうした視点に立つと、アルトの建築は単なる“名作”ではなく、人と自然の物語が堆積した『生きた風景』として立ち現れる」、ピーターとアニッカはそう語る。

3人のアルトの協働関係は、テキスタイルの模様になぞらえて説明された。アイノは色彩計画や家具・生活領域への細やかな眼差し、エリッサはディテールの統合と事務所運営、アルヴァは全体の統合と秩序の付与。建築の外形だけでは捉えきれない役割の重なりが、アルト作品特有の「柔らかさ」を生み出しているという。



アルヴァ アイノ エリッサ
3人のアルトを象徴するテキスタイルパターン

ここで引用されたのが、リートフェルト設計のシュレーダー邸の施主であり共同設計者でもあったトルース・シュレーダーの言葉である。「この家は私たちの子どもです。子どもができたときに、どちらの親がどこをつくったかなど聞いませんよね」。この言葉は、「誰の仕事か」という帰属を超えて、関係性の全体を捉えることの重要性を示していた。

3人のアルトの建築思想は、2つの言葉に象徴される。アルヴァの「建築とは、人々の生き方を形にすることだ」という理念、そしてアイノの「私たちは自然とともに、自然の中で生きる存在」という言葉である。この哲学は、夫妻が手がけた「パイミオ・サンナトリウム」において鮮やかに体現されている。結核療養施設である同建築には、患者の心身の回復を支える数多くの配慮が施されている。横たわる視点に合わせた天井の色調、柔らかな光の反射、静かな換気音、清掃性を考慮した曲面の床端部、呼吸を助けるパイミオチェア、これらのディテールが現地写真とともに紹介された。また、紹介されることの少ない、死者のための祈りの場でもある静謐なローズガーデンの存在は、建築が生に寄り添うと同時に、死をも包み込む器であることを物語っていた。



機能的な療養室



パイミオチェア(アルヴァが家具を生産・販売のためにアイノと設立したアルテック社の主要商品)。椅子に座るのはアニッカ



エントランスの有機的な受付



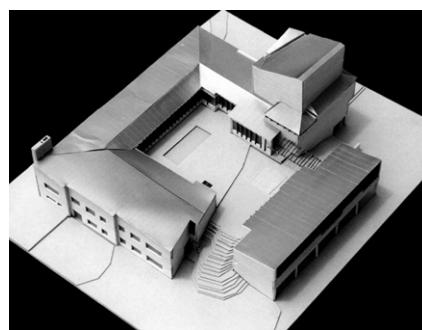
画家のエイノ・カウリアが協働した特徴的なフロアの色彩計画

ピーターとアニックは、アアルト建築の本質を「全体性」「文脈性」「人間中心のデザイン」「実験精神」「芸術と自然の融合」という五つの要素で整理した。建築から家具、照明、素材、風景に至るまでを一体の体験として統合する全体性。敷地や地域文化、生活を読み解く文脈性。光・空気・音・手触りといった身体感覚への深い配慮。積層合板の曲げ加工に代表される実験精神。そして芸術的造形と自然現象を調和させる姿勢。これらが、アアルト作品に独自の「生命性」を与えていたという。

自然との関係をめぐる象徴的な逸話

として、セイナッツアロ町役場でアルヴァが「窓ガラスは清掃してはならない」と指示したという話が紹介された。現地では本当に窓拭きがされていないそうで、曇りガラス状態のこと。森の影や光の揺らぎをそのまま室内に取り込み、建築を環境の「共演者」とするための選択である。制御された清潔な光ではなく、変化し続ける「生きた光」を受け入れる姿勢は、今日の環境共生型デザインにも通じる先見性を感じさせる。

アニックは、学生時代に初めてセイナッツアロ町役場の写真を見た時の率直な印象は「石の塊のようで良さが分からなかった」というものだったが、後年、実際に訪れた際に感じたのは「家のような温かさ」だったという。写真や図面ではなく、空気や湿度、光の質を身体で受け取る経験こそが、アアルト建築理解の鍵であると2人は強調する。町役場中央の中庭広場は、守られながらも開かれた温かな公共空間として、議場や図書館と連続し、「公共とは何か」を身体感覚として問いかけてくる。



セイナッツアロ町役場 全景



アルヴァが「蝶」と称した天井トラス構造体(セイナッツアロ町役場)

終盤では、今日の私たちが3人のアアルトから学び得るものとして、「五感を用いること」「理論や直線から出発しないこと」「自然や社会から着想を得ること」「技術と人間的価値の均衡」「遊び心を忘れないこと」が挙げられた。それらは設計技法ではなく、建築を人間の営みとして捉える姿勢そのものにほかならない。

セイナッツアロ町役場には、アルヴァと親交のあった画家フェルナン・レジェの作品がレンガの壁に埋め込まれている。その作品を照らすために窓まで設けられながら、最終的には上下逆に据え付けられたという逸話は、3人のアアルトの建築が持つ「柔らかさ」と人間味を象徴するエピソードとして印象的であった。



逆さまのフェルナン・レジェの作品

本フォーラムを通じて浮かび上がったのは、3人のアアルトの建築が「関係性の中で構築され」「物語として生き続けている」という事実である。建築は完成した瞬間に終わるのではなく、その場に集う人々の経験や感情と交わりながら、新たな物語を紡ぎ続ける。アアルトの建築は、今日もなお静かに、しかし確かな声で私たちに語りかけている。自然とともに生きること、人間の幸福を真摯に考え抜くこと、建築を生活の器として扱うこと。その声に耳を澄ますとき、建築が未来の「生き方」をいかに形づくり得るのかを改めて問いかけて、示唆に富んだフォーラムであった。

(委員長 萩尾昌則)

写真提供:ピーター&アニック